



平成28年度 日本重症心身障害福祉協会全国施設協議会

事務長 平山 信夫

平成28年度日本重症心身障害福祉協会全国施設協議会が、5月19日、20日に大阪市の大阪国際交流センターで開催され、当センターからは柳瀬院長、松下看護科長、平山の3名が参加しました。

本協議会は、公益社団法人日本重症心身障害福祉協会が主催し、全国の重症心身障害児者施設の施設長、看護管理者、事務長や、都道府県等の行政担当者が参加するものです。今年度は、123施設及び自治体から約400名が参加しました。

初日は、開会式に引き続き、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部の障害福祉専門官による「障害児支援について」の行政説明があり、引き続き、協会の木実谷理事長から、「今後の日本重症心身障害福祉協会の課題」として、公益社団法人化に伴い、今後は公益性を重視した取組みが一層必要になるとの説明がありました。

その後、熊本地震を踏まえ、「災害とどう向き合うか」と題した緊急協議が行われました。地震による被害を受けた「くまもと江津湖療育医療センター」からは、水、食料、衛生材料等の調達に苦労したこと、インターネット等で状況を発信することが有効だったこと、被災した在宅の利用者を受け入れる必要が生じたこと、職員確保のために被災した職員への支援も必要だったことなどの、生々しい状況報告がありました。一方、協会及び近隣県の施設からの支援状況として、協会で対策本部を立ち上げ、情報を収集・発信し、まずは近隣県の施設が救援物資を直接運んだこと、他地域からの救援物資は佐賀整肢学園を中継地にして配送したことなどの報告がありました。今後の課題として、関係団体との連携や、在宅重症心身障害児者の状況確認方法、東京が被災地になった場合の協会の本部機能のあり方などが提起されました。当センターの防災対策を充実させていくうえで、大変参考になる内容でした。

2日目は、午前、「これからの挑戦」をテーマに、6施設の施設長によるシンポジウムが行われ、各地域における課題と新たな取組みの状況が紹介されました。久山療育園からは、グループホームの取組みが、高槻病院からは、病院が中心となり地域ネットワークを形成し、在宅移行を目指す取組みが発表されるなど、在宅支援の具体的な事例が紹介され、有意義なシンポジウムでした。

午後は協会の組織である6つの専門委員会・部会からの活動報告とそれに対する質疑や意見交換などが行われました。医療問題検討委員会からは、28年4月の診療報酬改定内容の報告と、今後の課題提起、国への要望の経緯などが報告され、各施設の関心も高く、多くの質疑応答が交わされました。

なお、来年度の協議会は、北海道旭川市で開催される予定です。

協会ホームページURL:

<http://www.zyuusin1512.or.jp/>



看護の日

看護の日実行委員 井上 恭子

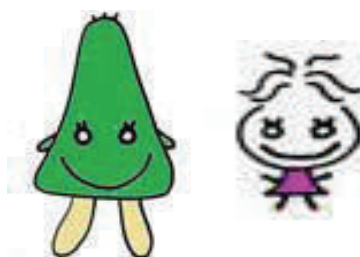
看護の日・看護週間とは、フローレンス・ナイチンゲールの誕生日の5月12日を「看護の日」、12日を含む日曜日から土曜日までを「看護週間」としています。

当センターは、看護の日のイベントとして、5月13日にあじさい館の多目的ホールで開催しました。

今年のイベントのテーマは「看護の心をみんなの心に」として、内容は例年の「健康チェック」のほか「防災関連コーナー」「妖怪体操」です。健康チェックコーナーでは、血圧測定を行ないました。体験コーナーでは、イージーロールを使って車椅子からベットへの移動を職員の方たちに体験していただきました。このイージーロールは利用者を抱きかかえずにベッドから車いす・ストレッチャーへとロール上のシートが回転するので無理な力を加えず、簡単に移乗できるものです。そのため、介護者の負担軽減・腰痛防止にもなります。

今回職員の方たちが体験してみて「怖い」「楽だね」などの感想がありました。防災関連コーナーでは、熊本の震災の影響のため、備蓄品や避難経路などのポスターを熱心に見ていました。妖怪体操では、利用者と職員と一緒に体操を行なった後、じゃんけんをして景品を選んでいただきました。アンケートの結果では、参加した利用者が楽しんでいたとの意見がありました。

参加数は利用者のご家族、職員で176名の参加があり大盛況のうちに終了しました。また、今回は午前と午後に分散して来場していただいたことで、殆どの利用者の方たちをお待たせする事もなくスムーズに体験していただくことができました。これもひとえに家族会や職員の皆様方のご協力のおかげだと思っております。



ドイツの古都で行われた学会に参加しました

小児科 長澤 哲郎

3月10日から3日間、ドイツ南部のフライブルグで行われた第2回世界高周波脳波研究会に参加、研究成果を発表してきました。高周波脳波（HF0）は、脳波の中でも目に見えないほど速い波の成分のことで、けいれんの起こしやすさを反映していることが分かり、最近注目されている分野です。

HF0を解析することで、てんかんの治療方針を適切に決めたり、将来の見通しを立てたりすることができます。まだ10年そこそこの歴史しかないので研究者も少なく、200名程度の参加者が一つの部屋に集い、文字通り膝詰めで話し合いをしました。新しい学問を作るのだという熱気にあふれていましたが、反面オタクな雰囲気もどこかに感じさせるアットホームな会でした。

私の発表は3日目にポスター形式（写真1）で行いました。てんかんの治療薬によってけいれんがコントロールされた後、薬をいつまで続けるかは脳波にみられるスパイク（とがった波）が消えるかどうかで通常判断します。しかし、一部の小児てんかんでは将来的に治療が不要になることが分かっていますが、スパイクがなかなか消えないために長期にわたって薬を飲むことがよくあります。

私は、スパイクが消える前でもHF0分析により治療を早めに終了できる可能性を、HF0の5年にわたる継続調査によって示しました。抗てんかん薬を長く飲むことは、副作用や経済的なデメリットのみならず心理的な負担が大きいので、早期に治療を終了できるかもしれないという結論に予想以上の反響がありました。

会場となったフライブルグ大学は1457年創立の長い歴史を持ち、フライブルグの街自体が大学を中心に発展してきた経緯があります。古い町並みを大切にしており、トラムのよく似合う街でした。毎日、ホテルの向かいにあるテーブルのあるパン屋で朝食をとり、トラムで時計塔の下をくぐって（写真2）会場まで通っていると、街の住人になったような錯覚を覚えました。そして、最終日の討論ではHF0を世界中のてんかん治療に役立てようという話で盛り上がり、その中で私もオタクの末席に加わらせて頂いたという実感が湧いてきました。帰途、重症心身障害児・者のほとんどの方がてんかんを合併していることから、HF0の研究をさらに発展させたいと改めて想いました。最後になりますが、留守を守っていただいた大越先生と3-2病棟スタッフの皆さんに感謝いたします。





看護科 吉山 のり子

「動物とふれあう会」は、日本動物病院協会のCAPP (Companion Animal Partnership program) 訪問活動です。平成21年3月からスタートし、この4月で8年目を迎えます。

普段の活動では、利用者は、10病棟と通所から合計23名が参加し、動物は犬が10頭位と(時々猫の参加あり)飼い主さんと大勢でにぎやかに活動しています。利用者の犬を見つめるまなざし、穏やかな表情だったり驚いたり・・皆さんがそれぞれの方法で「楽しい、おもしろい なんだろう？」と自分の気持ちを表現しています。

今回は、会場に大きな鯉のぼりを飾り、鯉のぼりのトンネルくぐり、棒を跳ぶパフォーマンスを楽しみました。

これからも動物とのふれあいを楽しみにしています。



看護職員就職説明会に出展しました

事務室 田中 稔浩

4月23日(土)東京都庁第一本庁舎5階大会議場において開催された、看護学生等を対象とした看護職員就職説明会に出展しました。当日、会場には232人の方の来場・13の病院の出展があり、活気にあふれていました。

当センターもタペストリーやグッズを活用し、呼び込みを行いました。20名以上の方と面談を行い、「話を聞いて興味がわいた。」「施設見学をしたい。」との声を聞くことができ、大変実りのあるものとなりました。

今後も看護学生等に療育の魅力やセンターで働くやりがいを伝え、一人でも多くの就職につながられるよう、積極的に活動していきます。



府中療育センターのブース



面談の様子

〒183-8553

東京都府中市武蔵台2-9-2

東京都立府中療育センター

電話 042(323)5115

Fax 042(322)6207

--*ホームページもご覧下さい*-*-*

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/>

fuchuryo/index.html